

オルトフォン・カートリッジ SPU MONO GM MKII の鳴らし方

このカートリッジの針は丸針で「R25 μ m」です。つまり現代のステレオカートリッジをベースにしたオーディオテクニカ AT33MONO (R16.5 μ m の丸針) と比べると、所謂オリジナルのモノラル盤の音溝とは相性がよいはずですが。

ところが、例えば Miles Davis の “FOUR & MORE” (Columbia CL2453) を演奏してみますと、むしろ AT33MONO の方が生き生きしたエネルギー感のある演奏を聴かせてくれます。

一体何故こうしたことになるのでしょうか・・・。

この SPU MONO は MC カートリッジでありながら出力電圧が高くて 3mV (通常の MC カートリッジの約 10 倍)、推奨負荷抵抗は何と！MM カートリッジと同じで 47k Ω です。なおコイルの線材は OFC です。

この問題はカートリッジをよーく眺めて考えるしか手がありません。

そもそもこのカートリッジには水平面が見当たらず、かろうじて上面の「ortofon mono」のマーク部分が小さな気泡管を載せて水平をチェック出来そうな唯一の場所となります。

もうひとつ気付いた事があります。それはカートリッジとアーム結合部分の軸線と針先の間隔が約 15mm あることです。ちなみに AT33MONO の場合は約 10mm です。

さらに、カートリッジ付属の Technical Data には Tracking Angle は 20 度と記載されています。

そこでトーンアームの高さを調節して目一杯の高さ +6mm まで上げてみました (AT33 MONO の場合は 0mm)。

結果は大変良好でした。一方、トーンアームの高さを 0mm まで下げますとサウンドは全く異なってきます (大体トラッキング角度が 1.6 度減少した状態)。

もし SPU MONO がうまく鳴らないというお悩みがある場合、トラッキング角 20 度をイメージしてトーンアームの高さを大胆に上げてみることをお勧めする次第です。

以上